

ボランティア冥利

山田 義昭 さん

(カブウェ／自動車整備／カブウェ職業訓練校／H26(2014)年度4次隊)
(ルサカ／柔道／ザンビア柔道連盟オリンピック・ユース・デベロップ・センター
／2018年度2次隊)



私は、2014年度4次隊、2018年度2次隊と2回SV（シニア海外ボランティア）としてザンビアに赴任しました。最初はルサカから北へ150kmにある町カブウェ（KABWE）の技術学校(KIT)で自動車整備に関する技術指導、2回目が首都ルサカのOlympic Youth Development Centre (OYDC)で柔道指導をしました。

最初に派遣されたカブウェの技術学校での活動の際、当時、自動車の電子制御システムは1980年代から既に市販車に採用され、小型車の大半は電子制御システム車となっていました。自動車科のシラバスには電子制御に関する指導項目はありませんでした。さらに、1年生はエンジン、2年生はシャシまたは電気装置の選択というシラバスであったため、エンジン→シャシと進んだ場合、電気装置は何も知らないまま、また、エンジン→電気装置と進めばブレーキの構造も知らないまま卒業となってしまうためシラバスの改訂が必要でした。

Give&Takeというわけではないのですが、彼には英文のシラバス改訂案作成の手伝いをしてもらうなど、お互いに自身の長所を活かした役割分担をしながら活動を進めました。



高圧洗浄機で実習場清掃



カウンターパートによる座学の授業風景

配属先は1月と9月の年2回の変則的な入学制度を取っていたことも影響し、クラス及び講義数が多いにもかかわらず教員が不足している状態が続いていました。自習の時間が多く、十分な知識を得るための講義を受講できない生徒の将来を心配した若い同僚（当時29歳）の熱心なアプローチにより、9月入学生への授業を全面的に私が行うこととなりました。

SVの立場ではシラバス改訂はできないので案として提出し、離任となりましたが、2回目にザンビアに赴任した時は、当時の若い同僚が、教育省の技術学校の資格試験・シラバスを司る機関（TISTO?）に転職し、私が赴任していたときに成しえなかったシラバス改訂の仕事に携わっていました。しかも、私が残っていたシラバス改訂案の資料を基にシラバス改訂の仕事をしている事を知り、ボランティア冥利に尽きる思いでした。



同僚による授業風景

受け入れることを教えてくれたザンビア

中山 かおりさん

(モンゼ／小学校教育／セント・ビンセント・デ・ポール・コミュニティ初等学校
／H27(2015)年1次隊)



私が配属先の学校で4年生の担任をしている頃、トンガ族の地にロジ族の子が転校して来ました。同学年の子どもたちよりいくつか歳が上のようなのですが、母語の違いもあってかはじめはなかなか馴染めずに緊張した様子でした。算数は得意ではありませんでしたが、授業外の時間に取り組める自主学習用の課題を用意すると、彼は進んで取り組み、わからないところを教えてほしいと私に聞きに来ながら、何度間違ってもくじけず挑戦していました。だんだんと力を伸ばし、友達とも仲良くなり、次第にその努力が認められ、全学年のリーダーが集まる代表委員会のメンバーにも選ばれて活躍するようになりました。



自主学習をする生徒

ザンビアの学校では、テストの点数に注目が集まりがちですが、私はテストの点数ではなく子どもたち一人ひとりの努力や頑張りをみんなの前で褒め、一人ひとりの成長をみんなで喜べる雰囲気づくりを心掛けていました。

彼は、私が行う特別支援が必要な子への個別指導もよく観察していたようで、その子なりの頑張りを気にかけてみるようになり、周囲の子が頑張っていた様子を私に報告してくれることもありました。数字の読み書きや、一桁の足し算引き算も難しい子が、かけ算九九の歌を頑張って練習し全て暗唱でき

るようになったときには、彼も含めクラスのみんなで大喜びして盛り上がりました。

ある日、彼は、将来私のようないろいろなことを教えられる先生になりたいと言ってくれました。私を喜ばせようと言ってくれたのかもしれませんが、信頼してくれていることがよくわかりとても嬉しかったです。友達と教えあいながら勉強をする様子、周囲を冷静に見ることができる力、みんなを気遣う優しさからは、必ず素晴らしい先生になるだろうと思います。夢が叶うよう願っています。

青年海外協力隊の目的の一つは「異文化社会における相互理解の深化と共生」です。活動では、特に配属先の先生方とどうやって相互理解を深めていくことができるだろうかとばかり考えていましたが、彼の言動から、先生方だけではなく、学校の子もたちやご近所さん、町で出会う方々など、たくさんのザンビアの方々が異文化をもつ自分を受け入れてくれ、相互理解を深めることができていることに気がつきました。私を温かく受け入れてくれたザンビア人の皆さんに心から感謝をしています。またいつか、大好きなみんながいるザンビアを訪れたいと思います。



配属先の先生方と

ザンビアでの協力隊活動を振り返って

加藤 秀男さん

(ルサカ／経営管理／ザンビア中小企業協会／2017年度2次隊)



ザンビアから帰国してあっという間に二年近くが経ちました。年々記憶力が悪くなってきておりますが、ザンビアで過ごした二年間は大変良く覚えております。

配属先での最初の数ヶ月は、協力隊活動が初めての事もあり結構厳しい期間でした。即ち、活動の目標設定から実行計画策定、そして活動スタートまで要領が良く分からず右往左往し随分脂汗を流しました。「この年になってまで、どうしてこんな道を自ら選んでしまったのか？」とため息をついた事も何度かあります。

転機となったのは協会の主要ステークホルダー達と面談し、彼らが困っている事の一端を理解した事でした。そして私のミッションは、彼らの課題を少しでも改善する為に、私ができる事を私のやり方で行う事だと思い至りました。その後、主な活動として地方でのビジネスワークショップをほぼ毎月実施しました。ワークショップでは日本では考えられない予想外のハプニングが毎回の様に発生し、その対応に大量の冷や汗をかいた事も今となっては良い思い出です。



カリバ湖の休日

もう一つの貴重な体験は、日本とは環境が大きく異なるザンビアの地で、静かな余暇を利用して、自分の既存のパラダイムから一歩離れて、今までの生

き方、人生で大切な事、世界観等について、自分なりにじっくり考える時間を持てた事です。今帰国して思うのは、日本は美しい自然がある豊かな国で、国民は勤勉・誠実です。そしていつでもどこでも安全で、何事もきちんと管理されており、改めてその素晴らしさを実感しております。しかし一方、経済が極めて大切な事は理解しておりますが、現在は社会全体の価値観が少し経済に偏りすぎている様な気もします。もっとも私自身も会社員だった時は、自分の頭で深く考えることもなく、経済性を追求して、ただ忙しく動いていました。ザンビアに来て視点が少し広がった気がします。

目下コロナで足止め状態ではありますが、多少でも貢献できるのであれば、再度協力隊活動にトライしたいと考えております。そしてザンビアでの反省を踏まえて、次回は多少なりともレベルアップした活動を行いたいと思います。

最後に、以下は以前ワークショップを実施した地方協会の会長から教えてもらった言葉です。優しいザンビア人を良く表していると思います。

“The strongest people make time to help others even if they are struggling with their own problems.”

アパートから見た虹



自ずから然らしむ

横山 敬子さん

(リビングストーン／観光／リビングストーン観光協会／2017年度2次隊)



任地のリビングストーンはザンビアの「観光の首都」と呼ばれています。配属先、観光業やレストラン関係者、住民、芸術家、タクシー運転手の皆さんは、お客様の案内について事前に計画する時、目をキラキラさせておすすめポイントなどを熱く語ってくれました。お客様が帰る時に「ザンビア、リビングストーン、最高でした！」と言って頂き、その喜びを活動に関係するザンビアの方々と共有できたことはとても光栄で観光従事者冥利につきたことが一番の思い出です。そして、ザンビアの方々が持つ天性のサービス精神には毎回敬服いたしました。



木陰で休むキリンの群れ

反対に辛かったことは、着任して約1年5ヶ月が過ぎた頃に配属先が移転し、約2畳半のスペースに机と椅子が一つだけで、机も椅子もみんなでシェア。高さの合わない椅子に座りパソコンに向かって仕事をして3ヶ月、腰椎椎間板ヘルニアになりました。周囲の人に腰の痛みと事務所が狭くてこうなったと遠回しに嫌味を触れ回ったところ、「ザンビア人は腰椎椎間板ヘルニアにはならないからわからない。」と軽く受け流されカチンとききましたが、これをキッカケに体を鍛え直そうと背筋や腹筋のトレーニングに励みました。

またハプニングもいろいろありました。ある日、空港へタクシーで向かっていた時、大通りのど真ん中で車が動かなくなり20分経過。間に合わないと焦り始め「車が故障して遅れそうです！でも絶対乗

りますから待っててください！」とダメもとで空港へ電話をすると「わかったからできるだけ急いで来てね」との回答。たとえ冗談でも優しさがとても心に染みしました。違うタクシーに乗り換え10分前に到着し、ドライバーさんが私のスーツケースを持ち一緒に猛ダッシュ。結果、機材の到着が遅れて間に合いました。ドライバーさん、受付カウンターのスタッフさん、私の3人は何かをやり遂げたチームのように固い握手を交わしお互いを讃え合いました。

いろいろ考えますと、日本でこんなに人間味溢れる生活を送ることはできないことに気づきました。ちょっとしたことでクレームになったり、時間に追われてイライラしたり無駄な規律にしばられたり。ザンビアの人々の天性のサービス精神や茶目っ気、心からの笑顔は、常に自然や動物に畏敬の念を抱きながらこの厳しい環境の中を生き抜いているからだと思えます。人生の半分を過ぎた私にとっての目標は、これからも雄大な自然と動物に畏敬の念を抱き、心に刻まれたザンビアの経験と共に五感を磨いて生き抜くことです。

リビングストーンに配属していたボランティアと「チームリビングストーン」を結成し、東京や大阪の旅博でザンビアの観光PRの活動をしてきました。一日も早く平穏な日々が戻り、再び旅博の舞台に立てることを一同で願っております。

水辺に集う象



何もできずに終わったラグビー大会 今も待つ「優勝のプレゼント」

坪井 健悟さん

(モンゼ／小学校教育／モンゼ初等学校／2017年度4次隊)



私がザンビアのモンゼ村に派遣されていた頃、日本ではラグビーワールドカップが開催されました。

アフリカには南アフリカやナミビアといったラグビー強豪国があります。しかし、モンゼ村の子どもたちはラグビーを知りませんでした。

日本でのラグビーワールドカップ開催は、多くの日本人がラグビーに興味を持ち、世界の人たちが日本を知るきっかけとなります。同じように、ザンビアの子どもたちがラグビーを知るきっかけを作りたいと思い、要請と併せて、ザンビアでのラグビー普及活動を始めました。

ザンビアの子どもたちはラグビーを楽しんでくれるのか？そんな不安もありましたが、初めてラグビーボールを手にした子どもたちは、まるで宝物を見つけたかのように目を輝かせ、不規則に転がるラグビーボールを必死に追いかけていました。



子供たちへのラグビー普及活動

ラグビー普及活動も終盤に差し掛かった頃、モンゼ村にラグビー部のある中等学校があることを知りました。そのラグビー部員は、定期的リビンググストーンへ行き、技術を習得しているとのことでした。私は彼らのラグビー愛に心打たれ、練習に参加しながら自分の持つラグビーの知識を伝えることにしました。

私の帰国が迫ったある日、南部州ラグビー大会が開催されました。「ケンゴに優勝をプレゼントする」彼らのこの言葉がとても嬉しかったです。

初戦の相手は、白いユニフォームを着たマザブカチーム。前半は互角に戦っていましたが、後半に大きく差をつけられ、負けてしまいました。初めて見る彼らの落ち込む姿に、私は言葉をかける事ができませんでした。

次の試合まで時間があったので、私は会場を出て昼食を済ませることにしました。すると、彼らから電話がありました。負けた相手のルール違反が判明し、結果が変わったというのです。電話から、彼らの喜ぶ姿が判然と伝わってきました。昼食を済ませた私はラグビーを知らない子どもたちを連れて会場に戻りました。すると、電話の様子とは異なり、不満げな表情で座り込む彼らの姿がありました。

話を聞くと、年齢の高い選手がいるという理由で、失格になったというのです。彼らは学生であり、規制を破るような行動はしていません。大人たちに抗議しましたが、上の判断は変わらず、その場を離れることになりました。帰り道、部員の1人が涙を流しながら私のところへ謝りにきました。彼らのために何もできなかった私は、また何も言うことができませんでした。

日本に帰国した今も、あの時の「ケンゴに優勝をプレゼントする」の言葉を信じて彼らからの優勝の報告を待っています。



ラグビー大会出場

良いも悪いも全部良くなる2年間

野中 日香里さん

(マザブカ／小学校教育／ナカンバラ初等学校／2017年度4次隊)



ザンビアでの一番の思い出は、配属先の小学校の教頭先生との関係です。私は新規要請ということもあり、配属先の JICA ボランティアに対する理解が浅く、信頼関係を築くことに苦勞しました。先輩隊員たちの体験談を聞いて、こういったことはよくあることだと覚悟はしていましたが、いざ自分がその立場になると、受け入れてもらえないというのは心細かったです。しかし国家試験を受ける学年を持った際に、生徒たちの頑張りのおかげで結果を出すことができ、そこではじめて教頭先生が私の活動を認めてくれました。その後は一番の理解者として支えてくれ、活動を軌道に乗せることができました。良い点をとることが全てではありませんが、生徒たちが、点数が伸びて喜んでいる様子、そして生徒たちの頑張りを見守る先生が褒めてくれたときは、2年間で一番嬉しかった瞬間でした。

が違いました。任国や任地が同じであっても、配属先の人たちや課題、そこに派遣される私たちとの組み合わせ、ここでも何もかもが違いました。

そのような中で「これだけ違うことばかりなのに、成果を他の人と比べて何になるんだろう」と気づけたことは私にとっては財産です。また、ザンビア人の陽気さ、自分を好きでいることの大事さ、大体のことはなんやかんや、なんとかしてしまう逞しさに日々触れることができたことも大きいと思います。

私は今30歳で、フリーランスで予備校講師として働いています。結婚をしていなければ子どももいません。きっと、これまでの私だったら周りと比べて、「正社員じゃなきゃ、もう30歳なのに、ちゃんとしなきゃ」と自分で呪いをかけて空回っていたと思います。でも自分自身を軸に考えて、だいたいなんとかなる！と、どんと構えていられる自分の生き方を、今は好きだなあと思っています。もちろんたまに「うわー！」となってしまうこともあります。そのたびにザンビアで感じたことを思い出せるのは、協力隊に参加したからです。一人でも多くの人が協力隊での活動を通して「何か」を感じ、経験されることを願っています。



折り紙を楽しむ生徒

私は協力隊として活動するまで、「0か100か」「完璧にこなしたい」「勝つか負けるか」と考えてしまうことが多かったです。そのように自分で自分の首を絞めては、嫌気がさしていました。しかし訓練時からそうですが、本当にいろいろな人が集まってきていて、今まで生きてきた環境や経験、考え方が違う、そして活動する場所や職種、何もかも



ザンビアの人たちとの出会いが生き方をかえてくれた

ザンビアに恩返しをしたい

原田香澄さん
(チョマ/PCインストラクター/セント・ムルンバ特別学校
/2017年度4次隊)



①コミュニケーションは現地語と手話と英語

セント・ムルンバ特別学校で、視覚や聴覚に障がいがある子どもたちへ、ICTの授業をおこないました。赴任当初は、自宅が学校内にありプライベート空間がないこと、障がいをもつ生徒との関わり方、現地語・手話でのコミュニケーションにとっても苦戦しました。赴任後、半年から一年は、生活に慣れることに一生懸命だったことを覚えています。

②休日は、子どもたちと歌、お絵描き、木登り

私の自宅は、配属先の敷地内にありました。そのため通勤は30秒で、通勤がとても便利でした。プライベート空間がないことがとても辛かったですが、いつでも、子供たちや同僚が遊びに来てくれて、一緒に歌を歌ったり、ご飯を作ったり、木登りをしたり、たくさんのザンビアの友達ができたのは、学校の中に住んでいたからかもしれません。



同僚とお揃いのチテンゲを着て

③「カスミはコンピューターウィザード」

「コンピューターウィザード」。これは、配属先での私のニックネームでした。ICTの技術移転を目的とし、カウンターパートとともに同僚向けにセミナーを実施しました。セミナー後に、参加してくれた先生が、別の先生に、PCの使い方を教えてくれていました。今でも、その連鎖が続いていることを願います。

④「トンガウーマンね」

チテンゲやシマなど、なるべく、周りの人と同じ暮らしをすることを心がけていました。ローカルドリンクである、チブワントウの作り方を同僚から教えてもらい、自宅で作りました。作ったチブワントウを同僚やマーケットのおばちゃんに味見してもらおうと、「おいしい！」とガブガブ飲んでくれたことがとても嬉しくて印象に残っています。

⑤福祉×ICT

ザンビアでのICT教育をきっかけに、福祉やIT技術に興味を持ちました。帰国後は、専門性を高めるため、IT業界へ就職しました。大人になってから学習することの楽しさは、自分磨きが大好きなザンビア人から教えてもらったのかもしれない。

⑥ザンビアに恩返しをしたい

ザンビアでの私の経験は、これまでの人生を見直すきっかけとなり、またこれから自分がどう生きていくか考えるきっかけにもなりました。そんなザンビアに心から感謝しています。また、2年間を安全に楽しく過ごせたのは、JICA関係者、同僚、応援してくれた仲間、家族のおかげだと感じます。ありがとうございました。

協力隊派遣50周年おめでとうございます。私も、その歴史の一部になれて嬉しいです。



同僚の先生と教材の準備

日本ではあり得ない、出来ない出会いと経験

真岩 亜里沙さん

(ルサカ／家政・生活改善／チルンドゥ郡農業事務所
／2017年度4次隊)



任期を終え、帰国してから違和感なくザンビア派遣前と変わらぬ生活をしているが、やはり第二の家族、多くの友人が出来たことでいつの日か、ザンビアを再訪したいと強く感じる。食文化の深さを知るため、外国へ行って直に文化に触れてみたいとも考えている。再訪したいと感じる心の源泉と思われる、ザンビア滞在中の、出会いや経験、気づきや楽しかったこと、嬉しかったことをいくつか記載してみたい。



同僚と過ごす時間

①電気の無い親友の家での食事中や夜の雑談には携帯のライトを照らし続ける事が自然と私の仕事となった。昼は血洗いや水汲みを当たり前に行い、樽での水運びにも時々呼ばれるようになって家族の一員になった気がして本当に楽しかった。

②任地に着任後、殆どの食事を近所の子供達の家でご馳走になり、ザンビアの食文化や生活習慣をとて身近で知ることが出来た。子供達に自覚が無くても親の仕事や家族構成によって少しずつ食べる量と種類が変わっていくのが興味深かった。

③配属先は予算不足で、農業事務所として予定していた業務のいくつかができなかったが、そのお陰で時間ができ、市場や道路で声をかけ色々な職種の人と繋がる時間ができた。森林庁のパトロールや漁業省の巡回、保健省のクリニック改善等、幅広い活動

になった。その時に会った村ではワークショップを行うきっかけにもなり、一期一会の大切さを知った。



近所の子供たちと歯磨き

④元々、生活習慣や生活環境が全く違う誰かを「助きたい、改善したい」といった熱い志を持って参加した協力隊事業ではなかったが、ワークショップで村長や住民の方々からお礼を言われたのはとても嬉しかった。

ザンビアに行く前、行った後、自分自身は何も変わっていないような気がするが、嬉しいこと、楽しいこと、興味深いこと、学びがたくさんあったと感じる。

任地の人たちは第二の家族



配属先の同僚達との信頼でつかんだ Silver Award

澤村 啓之さん

(ルサカ／経営管理／産業訓練センター／2017年度4次隊)



“Silver Award - ITC (Industrial Training Centre) !!”

学校の名前を呼び上げられた瞬間、同僚達と抱き合って喜び、歓声をあげた。ザンビアでの勤務2年間で一番嬉しかった瞬間だ。

ザンビア全国KAIZEN大会、Silver Award受賞。

ここまでたどり着くための道のりは決して平坦なものではなかった。学校に赴任したもののカウンターパート不在の半年間。取り組む課題を見つけるためスタッフ全員との面談。生徒を含めスタッフ全員を巻き込みチームワークを高めるために始めたKAIZEN活動。

5Sで掃除に取り組むも、みんな掃除の仕方が分らない。「何で自分たちが掃除をしなきゃいけないんだ!」

何度も全員を集めて5Sの説明。ようやく納得してもらい、全員で手作りファイル棚の作成、そして実習棟のペンキ塗り。

生徒、スタッフ全員と一緒に額に汗するうち、ようやく皆と自分の間に信頼関係が生まれてきた。「次は何をやるか?」「これはこうした方がいいんじゃないか?」

そのうちにスタッフからKAIZENについてもっと勉強したいとの声が出て研修会を開催。

最後には、作業時間の短縮というこれまで取り組んだことのない課題を設定し、その活動結果をKAIZEN大会で発表することが出来た。

これらの活動を通じて私が得た一番の収穫は「信頼関係」だ。国籍、人種が違って相手懐に飛び込み、自分の想いを誠心誠意伝えれば必ず道は開けるということだ。

活動中、幾度も壁にぶち当たったが、その度にその壁を打ち破ってくれたのが「信頼関係」だった。この経験は今後の自分の人生において一つの羅針盤になると思う。

「信頼を築けば道は開ける。」

今後もザンビアでの協力隊活動が末永く継続され、隊員それぞれが配属先の同僚達と信頼関係を築き、それをベースに活動の果実を実らせることが出来れば、協力隊活動を通じたザンビアと日本の絆はより太いものになっていくであろうと確信している。



(写真上) 学校清掃活動後に同僚と記念撮影

(写真下) スタッフの企画によるKAIZEN研修会



生徒・同僚全員に5Sの説明を行った

ザンビアで出会った全ての人に感謝を込めて

大澤 明浩さん
(モンゼ／小学校教育／チャールズルワングア初等学校
／2018年度1次隊)



「私が日本に行くことは実現しないだろうから、アキがザンビアに来てくれて、日本について話を聞くことができるのは、有り難いことだよ。だから、たくさん質問しているんだよ。」

私は、配属先のチャールズルワングア初等学校に隣接する教員養成校のゲストハウスで、養成校の教員とともに暮らしていました。彼と過ごした日々はどこを切り取っても私にとってはかけがえのない思い出ですが、その中でも、彼が私に伝えたこの何気ない言葉に、私はとても重みを感じ、今も心に残っています。

の機会を増やし、楽しむようになっていったと振り返ります。



配属先の子どもたち

彼との出会いにより、私はここで出会った全ての人たちに積極的且つ誠実な態度で接し、親切にしてくれることに対して感謝の気持ちをきちんと伝えるようになりました。この経験を改めて振り返る中で、私が彼との出会いを通じて前向きに成長できたように、彼も私との出会いを通じて日本を知り視野を広げることができたのだろうと想像します。出会いは様々な良さをもたらしてくれると理解していますが、私が経験した現地でのよき出会いのように、誰と出会うか、どんな対応を受けるかということも重要に感じています。帰国後の今もこの気づきを心に留め、柔和な心で人と接し、出会いと別れに丁寧に向き合うことをいつも心がけています。



村への移動に欠かせなかったタクシーの運転手たち

理由は2つあります。1つ目は、彼の言葉により、自己実現できることに対して周囲に感謝しようということ学びました。私がJICA海外協力隊としてザンビアに来て貴重な経験をもつことができていることは、自らの努力だけではなく、応援してくれる人たちに励まされ、現地の人たちに温かく迎えられるからということを再認識することができました。これにより、目の前の子どもたちにも挑戦できる機会をつくることに注力するようになっていったと振り返ります。2つ目は、彼の言葉により、出会いを大切にしようということ学びました。私の立ち居振る舞いや言動により、日本人に好感を抱いてもらえるか、日本の良さを感じてもらえるかを左右することを自覚することができました。これにより、私はそれまで以上に現地の人との交流



配属先の先生たち

ひろい空、ひろい大地、ひろい心

小林 さな子さん

(ムバラ／野菜栽培／ムバラ郡農業事務所／2018年度2次隊)



ザンビアの青くひろい空、どこまでも見渡せる大地、そして現地の人々のひろい心が、今でも忘れられません。私は、いま、東京で会社員をしています。東京の空は、ものすごく狭く、住宅やビルに囲まれ遠くの景色は何も見えず、誰が隣に住んでいるのかすら知らずに暮らしています。ビルや人に押しつぶされてしまいそうな気持ちになります。

ザンビアにいた時は、毎日農家さんのもとへ、ひろい空の下、どこまでも続く道を、バイクで走っていました。道は凸凹、山あり谷あり、川を超えて、せっかくの景色を楽しむ間もなく、足元に目がいきがちな運転でしたが、それでもひらけた場所にでると、つつい写真を撮りたくなるような感動的な景色に心奪われていました。



広い空と緑の大地が広がる

そして、バイクの運転、農作業に疲れて帰ってくると、いつも声をかけくれるロッジのスタッフがありました。私は、ロッジの一部屋を借りて暮らしていたので、キッチンもロッジのものを共有して使っていました。初めの頃、キッチンの利用時間が被らないように、時間をずらして使おうとすると、「シマできてよ。一緒に食べよう！」と声をかけてもらいました。それからというもの、毎日スタッフと一緒にシマを作り、ザンビア料理を覚えてもらいながら、ランチを共にしました。私の帰りが遅い時も、タッパーに入れて残しておいてくれました。き

と、ザンビアのどの隊員よりも、シマを上手に作れる自信と、たくさん食べた自信があります（笑）



ザンビアの主食シマ（右下の白い食べ物）

貧しい生活の中でも、食事をシェアする習慣がザンビアにはありました。農家さんのもとでも、「食べて帰りなさい」これが口癖のようでした。収穫した野菜を躊躇なく袋いっぱいにかけてくれました。そんなザンビアの人の大きな広い心が、とても素敵なおとこだと思えます。食べ物をシェアすることは、喜びをシェアしあうこと、幸せをシェアすることだなあと改めて感じました。私もその心を忘れずに、沢山の人に喜びをシェアしていきたいと思えます。

活動先で収穫した野菜



生徒と駆け抜けた2年間

原田 直美さん
(チンゴラ／小学校教育／チンゴラ初等学校／2018年度2次隊)



①生徒と駆け抜けた2年間

担当したのは小学5年生の算数。「とにかく楽しく！」をモットーにゲームやクイズなどを取り入れた授業を行いました。その一環で行った「掛け算九九スタンプカード」が子どもたちにとても好評で、カードを完成させようと一生懸命九九の暗記に取り組んでくれました。中には放課後まで教室に残って学習に励む生徒もあり、個々に向き合っているその時間がとても楽しかったです。

海外生活も先生としての仕事も、何もかもが初挑戦での協力隊参加で、当初は「自分がここにいる意味はあるのか」など隊員あるあるな悩みが尽きませんでした。子どもたちが出来ることを増やし楽しそうにしている姿をみると、自分がここにきた意味は少なからずあったのかもしれないと感じることができました。子どもたちに救われた2年間だったと心から思います。



任地の子供たちと

②ザンビア式?! 結婚式に初参列

ある日いつも通り学校へ向かうと、秘書のひとりから結婚式の招待状を渡されました。人生初の結婚式参列です。まさか、ザンビアで結婚式デビューを果たすとは思っていませんでした。当日、初の結婚式に心躍らせ会場へ到着。開場時間の15時になり、徐々に人が集まりますが、なかなか式が始まりません。30分、1時間、ついに2時間経っても始まらないため、一緒に来た同僚の先生に今日は中止なのか尋ねると

「This is Zambian time!」と元気のいい返事が返ってきました。なるほど。

結局、式は無事(?) 3時間遅れでスタートし、新郎も、新婦も、リングボーイも踊りまくるという異国感満載の結婚式を楽しむことができました。食事の提供が始まるとすぐに料理をタッパーに詰め込み、そそくさ帰宅する同僚たちの自由さと素直さに心を打たれながら、無事、初の結婚式体験を終えました。Mwila、お幸せに!



ザンビアの結婚式に参列

③「変えられないことは、受け入れる」

ザンビアでの生活が上手くいかなかった時、大学時代お世話になった教授に「自分の力で変えられないことは、受け入れることです」という話をしてもらったことがあります。赴任当初、何か現地のために役に立たなければと必死になり、自分ができそうなことや現地で必要なことは何か、必死に探していました。しかしその「課題探し」がいつの間にかザンビアの「いやなところ探し」になっており、自分自身の不甲斐なさや現地の人々に対する不信感や嫌悪感が募っていることに気づきました。そこから、自分の行動や考え方を見つめ直し、まずは積極的に学校の先生や周りの人々に関わり、自分のできそうなこと、やりたいこと、できないことを彼らの目線で考えるよう意識しました。

知恵や技術を受けることももちろん重要ですが、まずは自分自身が彼らのコミュニティの一部となり、その上でより良い方向をともに目指すことが協力隊生活のメリットであり意義であると感じています。

ザンビアの学生たちと一緒に

塩見 善則さん
(キトウェ／経営管理／ビジネス産業専門学校／2018年度2次隊)



私は、キトウェにある国立のビジネス・教育専門の短期大学で、経営管理の補佐ということで赴任いたしました。当初、学校側の意向でコンピュータと教育メディアの授業を担当しておりましたが、のちにシステム管理の充実ということで、学籍及び経理のデータベース導入の責任を負うようになりました。

ような苦学生こそ、将来生きていくために知識や技術が必要だと思います。

生徒たちは、卒業すると数学やコンピュータの教員をめざすものが多かったため、郷里の小中学校で教育実習を行っていましたが、私もその評価をするために小中学校を訪問しました。その学校の子供たちの熱心な勉学姿勢と笑顔が印象的で、この子供たちがザンビアの将来なのだと思えました。また、教え子たちも素晴らしい仕事をしていると感じた次第です。

帰国して、私はよく家族や知人にザンビアの話をしませんが、恵まれない環境のもとで生活しているザンビアの人々の姿は勇気と力を与え、マラリアや医療不全で亡くなる多くの人々のことは、生きることの大切さを痛感させてくれます。ザンビアのことは一生忘れません。



近隣の友人たち

その学校では、いろいろトラブルがありました。まず、赴任2か月後に、学長が更迭され、会計部長が謹慎となりました。政府の援助もなく、教員の給与の支払いが3か月遅れ、教員たちは2週間のストに突入しました。その後、まもなく、私のカウンターパートである学部長が肝臓病で急死し、学校葬となり学生たちも参加して盛大な葬儀が執り行われました。ザンビアの人々の「人の死」に対する感情表現の豊かさにも驚きました。その後、帰国時まで、学校の経営難は続き、生徒から学費を徴収することに力が注がれました。多くの学生は月払で支払っているのですが、その支払いが滞った学生を教室に入れられないようにするという強硬手段が取られ、教員は授業の初めに学生が授業料支払証明カードを持っているかどうかチェックすることとなりました。正直言うと、私は、苦学生たちを締め出すことが忍びなく、あまりチェックをせず、放課後、参加できなかった生徒たちにも補習を行いました。その

ストリートチルドレンの施設にて



私のザンビアンライフ

原 汐音さん

(セレンジェ／小学校教育／ミセロ・カピカ・デモンストレーションスクール
ルサカ／小学校教育／プリンスタカマド初等学校
／2019年度2次隊)



私の配属先は、セレンジェにありますミセロ・カピカ・デモンストレーションスクールと、首都ルサカにありますプリンスタカマドベイシックスクールの2つ。そこでの私の要請は、どちらも小学校教育隊員として、ザンビアの小中学生に向けて理数科目の指導をし、彼らの理数的能力を向上させることでした。実はザンビアの多くの子ども達、数学に対してかなりの苦手意識を持っています。というのも、多くの子が基礎的な数学の知識も身に付いていないままだから。それゆえ、数学の授業は「やりたくない!」という子どもが続出。なので私の活動大半は「なんとか数学を好きになってもらう」ことになり、それに対する試行錯誤の連続になりました。そうやって活動を続けていくと、徐々に子ども達から「先生、分かった!」という信号がでるようになってきました。自分のノートについての「正解」を示すマークを誇らしげに見つめる子どもの姿。どんなに授業準備で寝不足になっていても、あのキラキラとした表情だけで全てがチャラになるほど、私にとって本当に格別な瞬間でした。今思っても、きっとあの瞬間が、私の協力隊としてのモチベーションになっていたのでしょう。欲張りな話ですが、今は、私なりに全力を尽くしたあの日々が、少しでも子どもたちの未来に繋がってくれればと願うばかりです。



日本の中学校とオンライン交流を楽しんだ

活動以外にもザンビアでの思い出は尽きません。一つ挙げるなら、「ザンビアの人たちの信じられないほどの優しさ」。ザンビア人は、とにかく優しい! カウンターパートも含めた配属先の先生達はもちろん、街中の人達さえも優しい! なので、私がザンビアで出会った人は皆、フレンドリーで、いつも誰かを慮っています。同僚なんかは「昼飯食ったか?」と心配して、自分のご飯を私に食べさせてくれたりしました。来た当初は「ザンビアの為に頑張るぞ!」だなんて意気込んでいましたが、今思えば、結局、ザンビアの人たちに守られ続けた2年間だったなあ、なんて思います。情けない限りではありますが、きっと協力隊としていかなければ触れられなかった、日本じゃ感じない温かさだったなあと今改めて感じます。本当に感謝でいっぱいです。

日本に帰って来た今、未だに色濃く残るザンビアで過ごした協力隊としての日々。全ての日々を、今度は多くの人に伝えていきたいです。



真剣に授業に取り組む生徒たち

カウンターパートの
みなさんから

Dr. Julius Kaoma from National Council for Scientific Research

1. What was the most memorable innovation?

Vividly innovative especially in the execution of tasks and assignments. Bwana Tokuhashi was resourceful in the execution of each task. He was a team player and we appreciated how he planned his work and how communicative he was with us at NCSR. The most important thing was how respectful he was to everybody and how he was sharing the information and data.



Mr. Tokuhashi met the First President, Ex. Kenneth David Kaunda

Name of JOCV: Mr. Kazuhiko Tokuhashi
Assignment Period: 1987 to 1990
Field of Volunteer: Coal Briquette

2. What was the most memorable private event?

Tokuhashi-san was very accommodating in the way he was dealing with each one of us. He was honest in his interaction and respectful of our tradition. Mr. Tokuhashi was not a pretender and he easily fused in our culture. Always looked at his humility and his assertiveness and always keen to learn our way of living while sharing his culture.



With colleague's family

3. What was the most surprised experiences?

The most surprising experience was his humility and his dedication to work. He was always ready to give a hand. He was not choosy when it came to meals. He also introduced us to some Japanese dishes.

4. What was the JOCV program for you?

What we admired the most from both JICA and JOCV interaction was their appreciation of what we know and how their interaction in disseminating their knowledge both by deeds and communication. Their attitude was not intrusive as they were good listeners and how they operated within the environment they found themselves in and they live within what's offered to them. The outcome of any project matters the most. Record keeping is important and everything counts. Nothing is left unturned.

Mrs. Professor MPS Ngoma from University Teaching Hospital

1. What was the most memorable innovation?

Nursing care of the newborn!!
Hitomi was always so friendly and talking to everyone and loving everyone.



Name of JOCV: Mrs. Hitomi Tokuhashi

Assignment Period: 1989 to 1991

Field of Volunteer: Nursing for

Newborn Health



3. What was the most surprised experiences?

She loved sharing Japanese arts and food with all her friends.

2. What was the most memorable private event?

JICA get together.



4. What was the JOCV program for you?

Major contribution to the care of new born babies at NICU with doctors and nurses from Japan.
Thank you JICA for the NICU. Hitomil was so cheerful and always willing to work with everyone.

Mrs. Prudence Mwaanga from Moomba Primary School

1. What was the most memorable innovation?

Fun-Yuki used to come to my home and have fun. She made a Japanese traditional wear for my daughter. She liked fun moments especially when she is with kids. My daughter made artificial green grass nails too. It was funny. She was full of innovation and very eager to learn other tribes vividly. We shared a lot on Zambian and Japanese cultural value and norm. Her wardrobe was very nice full of Zambian chitenge wear.

2. What was the most memorable private event?

During our private moments we could cook and eat together, go for outings and have snacks. She introduced me to all her visitors and we could have supper together. I really miss her.

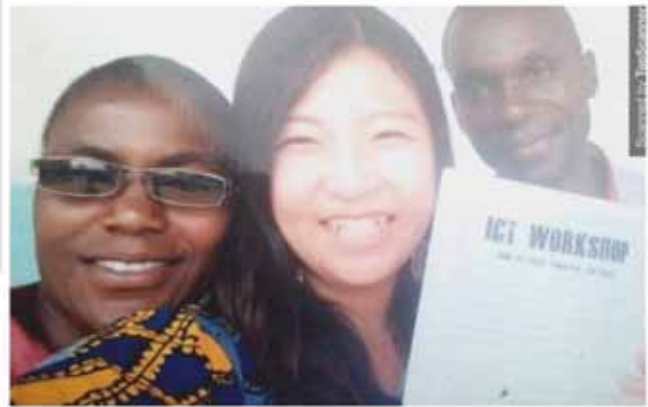


Name of JOCV: Ms. Yuki Kuramoto
Assignment Period: 2017 to 2019
Field of Volunteer: PC Instructor



3. What was the most surprised experiences?

Yuki was a very principled young lady. She never liked men like proposing to her. She disliked that. That was good.



4. What was the JOCV program for you?

For me, JOCV program is to learn more about I.C.T. and learnt a bit of Japanese. The impact from JOCV was to be focused, innovative and interact with other races.

Mrs. Annah Nawa from Chilanga DACO

1. What was the most memorable innovation?

The most memorable innovation was Solar Food Dryer Baskets for food preservation. Izumi came up with a round design with an alternative materials to cut the cost. We had never used these tools in such a way. We also taught to women's groups and youth groups in our community and a district nearby.



Name of JOCV: Ms. Izumi Takahashi

Assignment Period: 2018 to 2020

Field of Volunteer: Home & Life

Improvement



2&3. What was the most surprised experiences?

Welcome songs and Tongas dances for Izumi as a new volunteer by the Mwem-beshi community might be a surprise for her. Despite having been shy at first, she felt really happy because we were able to communicate regardless of language barrier. It was the first experience for her!



- ◇ Cooking demonstrations
- ◇ Making food solar dryer baskets
- ◇ Conducting survey
- ◇ Food processing and preservation Training
- ◇ Facilitating



4. What was the JOCV program for you?

The JOCV program under Ministry of Agriculture involved Livelihood improvement activities in both Farming and Urban communities. Izumi and I taught on the importance of food and Nutrition. Farmers learnt nutritious food keeps us healthy and it strengthens our communities, by reducing malnutrition. As a working team we prepared many materials before lessons or cooking Demonstrations. We learnt lots of her skills and technical know how.

1. What was the most memorable innovation?

Travelling to Luanshya (400km) in March 2019, to attend our Annual General Meeting. It was a team building event as we spent time together, outside working environment.

Name of JOCV: Mr. Hideo Kato
Assignment Period: 2018 to 2020
Field of Volunteer: Business Development & Aqua Culture



Meals with colleagues

2. What was the most memorable private event?

When we all went for drinks after hours to share a light moment, the three of us, the Accountant Edwell, myself and Kato-san. It was also a team building moment.

3. What was the most surprised experiences?

Kato-san was always alert and shared very little unless you do a lot of probing. He was always early to the office, brought his own lunch would always stay until knocking off time. Even when you gave him time to go early.

Chatting + Drinking = Good Friendship



4. What was the JOCV program for you?

Kato-san provided a lot of guidance to our members. He also provided market linkages and a lot of capacity building in marketing, and other programmes.

Mr. George Chikampa from Prince Takamado Primary School

1. What was the most memorable innovation?

When Shion Hara taught a lesson in our local language (Chinyanja), it was fun. Dancing our local dances.

2. What was the most memorable private event?

How to prepare our local dishes, and learning local language from teachers and pupils.



Name of JOCV: Ms. Shion Hara
Assignment Period: 2021 to 2021
Field of Volunteer: Primary Education



3. What was the most surprised experiences?

Always running and hurrying when going to class. JOCV told us that at least every Japanese is expected to run about 10 km.



4. What was the JOCV program for you?

The ability of the JOCV to adapt teaching and learning environment. The JOCV program helps to learn some of the Japanese cultures.

JOCV sacrificed their lives to teach Zambian children especially with COVID-19 around.

編集後記

2020年、ザンビアにおけるJICA海外協力隊事業は50年の節目を迎えました。しかし、この年はCOVID-19の世界的な感染拡大によって派遣中の全隊員が本邦に退避する事態となり、当国で予定されていた50周年を祝うイベントも延期となってしまいました。

隊員の退避から約一年後となる2021年4月、4名の隊員の再赴任がかない、一年遅れとはなりましたが、50周年を記念するイベントをいくつか開催することができました。

50周年を記念したイベントの締めくくりとして本記念誌が企画され、最初の青年海外協力隊としてザンビアの地に降り立った松下隊員からコロナ後の再派遣を果たした原隊員まで総勢34名のOVの方々と6名の現地カウンターパートの方々のご協力の下、無事発行に至りました。

ご寄稿頂いた文面からは、OVの方々だけでなくカウンターパートの双方に、帰国後の年数にかかわらず、共に過ごした時間が鮮明な記憶として刻まれ、当時、互いに与え・与えられた影響が、今でもみなさんの中でも生きていて、人生の糧となっていることが伝わってきました。これこそが協力隊事業の醍醐味と感じています。

隊員が任国に不在となる未曾有の期間を経て、JICA海外協力隊事業の新たな章が始まったように感じています。これからは支援する側される側という立ち位置ではなく、ともに未来の世界を作り守る仲間という新たな協力関係を築くための礎の一つとして、JICA海外協力隊が活躍していくことを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の記念誌発行にご協力いただいたOVやカウンターパートの皆さまに心より感謝申し上げます。

編集担当一同 2022年3月吉日

歴代事務所関係者一覧 (2022年3月31日現在)

事務所長	協力隊調整員、ボランティア調整員 企画調査員 (ボランティア事業)	医療調整員 在外健康管理員
赤星 則昭	小瀬川 修	飯野 徳太郎
大椋 哲夫	稲見 廣政	稲葉 りか
奈良輪 睦美	大芝 博明	穴田 拓治
中垣 長睦	佐藤 善子	廣瀬 淳一
山口 廣治	洲崎 毅浩	菅原 純子
富田 廣造	日下部 勝英	築山 佳代子
神谷 弘司	佐藤 幸雄	税所 信治
江畑 義徳	野田 久尚	小島 正行
石川 満男	湯澤 洋司	田中 哲平
佐々木 克宏	岡田 鉄太	大西 孝規
乾 英二	小林 勤	森北 裕美
鍋屋 史朗	安藤 ゆう子	竹信 宏一
寺西 義英	小畑 けい子	吉村 恵侑
野田 久尚	内田 圭二	前出 なお子
花井 淳一	工藤 幸男	安川 直人
徳橋 和彦	末岡 直樹	新関 郁子
	原田 由紀	山口 浩司
	彦根 克己	松本 尚
	近藤 康雄	羽野 友和
	藤島 一枝	桑園 いづみ
	小中 隆文	赤星 亜朱香
	旦 育子	塚越 貴子
	井上 和美	赤堀 育美
	小檜山 賢哉	堀田 哲也
	櫻井 美奈子	
	星 誠	
	名村 欣哉	
	眞鍋 真	
	高橋 信弥	

參考資料

ザンビア共和国概要

1 国土面積

752,610平方キロメートル

2 人口

1,838万人（2020年、世界銀行）

3 首都

ルサカ（海拔 1,272メートル）

4 民族

73部族（トンガ系、ニャンジャ系、ベンバ系、ルンダ系）

5 言語

英語（公用語）、ベンバ語、ニャンジャ語、トンガ語

6 元首

ハカインデ・ヒチレマ 第7代大統領
（2021年8月24日就任、任期は5年）

7 略史

1964年10月24日独立
（旧宗主国英国（北ローデシア））
カウング初代大統領就任
1973年 第二共和制（一党制施行）
1990年 第三共和制（複数政党制移行）
1991年 チルバ第2代大統領就任
1996年 チルバ大統領再任
2002年 ムワナワサ第3代大統領就任
2006年 ムワナワサ大統領再任
2008年 ムワナワサ大統領逝去
バンド第4代大統領就任
2011年 サタ第5代大統領就任
2014年 サタ大統領逝去
2015年 ルング第6代大統領就任
2016年 ルング大統領再任
2021年 ヒチレマ第7代大統領就任

8 経済

1) 主要産業

鉱業（銅、コバルト等）、農業（トウモロコシ、タバコ、綿花、大豆）、観光

2) GDP

193億米ドル（2020年、世界銀行）

3) GNI（一人当たり）

1,190米ドル（2020年、世界銀行）

4) 経済成長率

マイナス3.0%

（2020年、世界銀行）

5) 主要貿易品目

輸出：銅、セメント、タバコなど

輸入：化学製品、石油製品、薬剤など

（2020年、UN Comtrade）

※外務省ウェブサイトより抜粋



ザンビアでのJICA海外協力隊 50年間のあゆみ

- 1970年3月31日、最初の青年海外協力隊員がザンビアに到着した。
- 1978年10月、ザンビア初となる女性隊員が派遣された。その後、2000年に男女の割合が50:50となった。
- 2001年4月、最初のシニア海外ボランティア（当時の名称）が派遣された。その後、2020年までに派遣されたシニア海外ボランティアの総数は95名に及んだ。
- 2017年3月、それまでの総派遣隊員数（延べ人数）が1500名を超えた。
- 2020年3月、COVID-19の世界的な感染拡大の影響で、派遣中全隊員（68名）が本邦退避となった。
- 2021年4月、本邦退避中だった4名の隊員がザンビア（ルサカのみ）に再派遣された。
- 2021年11月、COVID-19の影響により開催を延期していた「JICA海外協力隊のザンビア派遣50周年を記念する式典」を開催した。

50年間の派遣実績（1970～2020）

職種別派遣人数（人）



地域別派遣人数（人）

